

令和7年度
被爆地への中学生派遣事業
報告会



富士宮市

核兵器廃絶平和都市宣言

平和の象徴である富士山を持つ富士宮市は、核軍拡競争の悪循環が核戦争の危険を増大させていることを憂い、人類の生存と恒久平和のために、すべての核保有国に対し、核兵器の廃絶と軍縮を求め、わが国の非核三原則が完全に実施されることを願い、国際社会の連帯と民主主義の原点に立って、核兵器廃絶の世論を喚起するため、ここに「核兵器廃絶平和都市」となることを宣言する。

昭和59年10月2日 富士宮市

被爆地への中学生派遣事業 参加者の作文・レポート

語り継ぐ過去

私はこの派遣事業に参加するまで、展示品を見ていたら涙がでてしまうと確信し、それくらい悲惨だったのだろうと想像していました。

けれど実際にその地に立ち、展示や平和祈念像を目にしたとき、私は涙を流すことすらできないほどの衝撃を受けました。悲惨さがあまりに大きく、胸が締めつけられ、言葉も感情も追いつかないという体験をしました。

私は初めて長崎原爆資料館に訪れ、当時の人々が使っていた日用品や焼け焦げた衣服などの展示品を見ることができました。そして、ひとつひとつに持ち主や持ち主の家族の思いがあり、それが突然奪われてしまった事実に関心を持ちました、展示品を見ている人には外国から訪れている方もいて、悲惨な過去を知り涙を流している方もいました。

また、平和公園にある平和祈念像や周囲の祈念するために作られた建造物も、それぞれ深い思いや願いが込められていることを知りました。二度と同じ悲劇を繰り返してはならないという強い願いを表していて、その祈りが今の自分にまで届いていることを感じました。

しかし、展示や説明を受ければ受けるほど、私は「戦争の悲惨さは言葉では表せない」という思いが次第に強くなっていきました。

私が何よりも衝撃を受けたのは、語り部の方のお話しで、小学二年生になって初めてアイスクリームを食べたということです。私達はコンビニに行けば色々なアイスクリームが食べられますが、当事の人達はそんな高価なものは食べることはできませんでした。アメリカから届く悪臭のする雑穀米を食べることか普通だったとき、今の生活がとれだけ恵まれていて、幸せなのか身をもって感じました。

私は今回の派遣事業を通して、戦争の悲惨さを「言語化することができない」という事実そのものが戦争の現実の重さを示しているのだと気づきました。

そして、だからこそ私はまだ世界には、核兵器を持っている国があると同時に戦争が続いている国があります。もう戦争に幸せを奪われないためにも声を上げ続けなければいけないと思います。

私は、今の平和な生活を守るために、たくさんの人に伝え、声を上げ続けたいです。

派遣日: 8月18日~8月20日

長崎への派遣事業レポート

富田第一中学校 岡部新奈

1日目 出島和蘭商館跡



豆知識
長崎のハイウェイのパーキングは出島の形をしている



鎖国をしていた江戸時代の日本では、外国と交流できる唯一の場所だった。オランダ人だけが住んでいた建物や暮らしが再現されている。出島で暮らしながら年に2回出島の外に出ることができた。そこから医学や数学などの外国の知識が日本に伝わった。



長崎新地中華街

肴巻 揚げ餃子
・エビ肴巻さ・角煮まん
・ハチマキまん・小籠包
・ゴキ団子・豚まん

700円くらい



なんと10食くらい

トラバース



トラバースはスコットランド出身の商人で日本の近代化を支えた人。日本最古の洋館

トラバースから見た長崎の景色
長崎の地形はすりばち状になっており、高低差があるためエレベーターがある(建物)

2日目 長崎平和記念公園



爆心地とな。7.5場所のすぐ近くにつくられた。原爆で失われた命、多くの悲しみと哀しみ、世界中の人に平和の大切さを伝えるためにつくられた。

ピースの意味

- ・右手→原爆の脅威を象徴している
- ・左手→こころには平和の願いをこめて
- ・折り曲げた足→原爆投下直後の静けさ
- ・立てた足→こころに、平和を求めた

作者

北村西望

高さ

9.7m

完成

1955年



折り鶴の塔

平和の願いをこめて折り鶴
届けられず折り鶴を安置している

折り鶴→平和への祈り

長崎原爆資料館

原爆がどのように投下されたのか、どんな被害をもたらしたのか、原爆が落ちた直後の写真や遺品、当時の町の様子が展示。



資料館の中には沢山の折り鶴があり、その数に圧倒されるほどだった。折り鶴は平和への祈り

実際の原爆



被爆体験講話の受言者

まこととみこ様 3歳の子

被爆の様子

人々の死にみまわった

「このお母さんがお母さんだった。」

1. 世界中の若者に平和を伝え、世界を平和に保つために努力を続けること。
2. 二度と戦争をしないように努力して行くこと。
3. 核兵器は絶対にはいりたくないこと。
4. 戦争で人を苦しめるな。

長崎を最後の被爆地に

私がこの長崎中学生派遣事業に参加したのは本当に些細な理由でした。「元々戦争に少し興味があり、今年は広島ではなく長崎だったので、いつもと違うところに行くなんて勉強になりそうだし行ってみようかな！と思い参加しました。

長崎に行って私はとてもびっくりしました。なぜならとても栄えていたからです。富士宮よりももっと都会で、こんなところに原爆が落ちたなんて信じられないと思いました。でも私は、長崎原爆資料館や被爆者の話をきいて原爆が落ちたことがうそのようで本当の話ということを実感しました。私が一番印象に残っているのは原爆資料館でみた被爆者の写真です。大きな火傷を負っている男の人の写真や小さい赤ちゃんが亡くなっている写真などがあり今でもその写真は頭から離れません。

その中でも、特に小さな男の子がさらに小さな亡くなってしまった兄弟をおんぶしている写真が印象に残りました。私には弟と妹がいます。正直今の私には、おんぶして力強く立ちながら火葬を待っているなんてとてもできることではないと思います。自分より小さな男の子がそのようなことをしなければならぬ戦争や原爆を二度と繰り返してはいけないと思いました。

平和公園に行ったとき私はこの真上で原爆が爆発したなんて信じられませんでした。周りにはきれいに整えられていて、とても歩きやすい道があり、鳩がいっぱいて平和祈念像があって…。とてもきれいで大きな平和祈念像が平和の尊さを教えてくれたと思います。なので、私は被爆者の松本様がおっしゃったように選挙権を持ったら必ず選挙に行きたいと思います。今の若い人たちはどうせ私たちが行っても変わらないと思っている人が多いと思います。でも行くことに価値があると思います。なので私はもうこんな戦争が二度と起きないように選挙に行きたいです。そしてこの長崎について知らない富士宮市民にも原爆の恐ろしさを伝えていきたいです。

今の長崎は原爆が落ちたとは思えないくらい栄えていて青空が広がっています。原爆の後には黒い雨もふって、差別も多くてとても大変だったと思います。でも今その原爆が本当に落ちたか疑ってしまうのは、これまでの人たちが長崎を頑張って復興してくれたからだと思います。蓋を開ければ原爆に関することが知れて、今もなおそれを伝え続けようとしてくれている人がいます。長崎を最後の被爆地にできるように私もできることを続けていきたいです。

長崎への派遣事業 2025.8.18~2025.8.20

"長崎を最後の被爆地に" 村松 榮奈

1日目 出島和蘭商館跡

2日目 平和公園

原爆資料館

島立長崎死没者追悼

祈念館

大浦天主堂

グラバー園

2日目 平和公園



"原爆資料館"



今日の派遣事業で
1番印象に残ったこと
小さい時からお年寄りまで
色々な人が観客に
あいて正直信じられ
なかった。11:02でとま
った時計は胸が締めつけ
られしめつけられた。

お弁当が炭化してしま
ったものやガラスびんが
7はがってしまっただ
けで、音階ならありえな
いものが決まっていた。
追悼祈念館には
祈りつるも決まってい
て全て千羽するだった。
いたるときにつるがあ
った。

1日目 "出島和蘭商館跡"



右手…原爆の脅威

左手…平和

目…犠牲者の冥福を祈る

右足…長崎の朝にて

左足…未来へ進んでいく希望

作者 北村西望氏

高さ 9.7m



"被爆者の話"

今の長崎県民の
近くに家が壊れた
松平様は涙のう
ちに被爆した。
今の若者には
「堅牢に町・国はいい
と休んだいそう」

"永井隆記念館"



"グラバー園" →

長崎県が見れるグラバ
ー園。洋館で、海外にい
るのかもしれない。だ
った。お家の中もなくて、教科書
にのってそうだった。



教科書で見たのと同じようはで
がそのままある!!
小さな出島もあって面白かったし
にはより都会のまんまな感じがある
のがびっくり!!

とてでもまわりの人々をみて
くらしていたことにおどろいた。

「中学生長崎市派遣事業」に参加して

原爆が落とされた都市と言われてどこを思い浮かべるだろうか。広島市か。長崎市か。多くの人は、広島市を思い浮かべるだろう。実際に Google で「原爆について検索すると、広島市は約六百三万件、長崎市は約四百三十一万件ヒットした。広島市での原爆の悲惨さを知っている人も長崎市については知らない、という人が多いのが現状ではないだろうか。

僕は夏休みに中学生長崎市派遣事業に参加した。広島原爆については「はだしのゲン」で少しは知っているが、長崎については全くというほど知らないため、興味があり参加した。

印象に残ったのは三箇所だ。まず一つ目は長崎原爆資料館だ。熱線で溶けてしまったガラスや橋に付いている看板が曲がっている現物が展示されていた。見るだけでも生々しく恐ろしく感じるが、それらを実際に触ることができたことが印象に残った、また爆心地付近では、殆どの金属を溶かすことのできる、約三千度から四千度に達し、体は跡形もなく溶けて人の影だけが残った写真や、原爆の熱線によって原爆ケロイドが発生している、見るも恐ろしい写真なども展示されていた。また、原爆により肥大化した人間の脾臓も展示されており、大変衝撃的だった。また、その時だけでなく、現在もまだ苦しんでいる人がいることも知った。

二つ目に、平和祈念公園だ。ここには青い男性の像、平和祈念像がある。右手は空に向け原爆の恐ろしさを、左手は水平に伸ばし平和を、そして閉じられたまぶたは犠牲者の冥高を祈ることを意味している。これは、核兵器の廃絶と世界平和への願いが込められたものだが、僕はこの像を見て、強く生きようとする姿や生きるエネルギーを感じた。

三つ目に浦上天主堂だ。キリスト教の教会で明治期につくられたが、原爆により崩壊した。爆心地から五百メートル離れていたが、大きな鐘も落下し、壊れてしまった。どれだけの威力だったかと驚く。

僕はこの事業を通して当時の長崎は、想像していた以上に悲惨だということを知った。これまでに「はだしのゲン」を見たり、授業でも戦争の話を聞いたりしたことはあったが、実際に自分の目で見ることがこれほどまでに衝撃的で、心に刺さるということを実感した。「百聞は一見にしかず」という言葉があるが、実際に見たことは人生の中でも最も印象に残る出来事となった。

僕が最も伝えたいことは、原爆や戦争という言葉は、それほど私たちにかけ離れていないということだ。戦争というと、なかなか現実的に想像できず、テレビや教科書などで見るシーンを考えがちだ。しかし、現在ウクライナ侵攻や中東での紛争など、世界では人が殺し合い、多くの人が毎日どこかで命を落としている。日本も世界も戦争になりかねない問題をいくつも抱え、いつ戦争が起きても、いつ日本が巻き込まれてもおかしくない情勢だ。「世界平和」と言うことは簡単だが、現実はそんな簡単ではない。しかし、そう言っているだけでは何も変わらない。

僕は二つ考えた。一つ目は、原爆の恐ろしさや戦争は誰も幸せにならないことを知るために、日本や世界の戦争について興味を持つべきだということ。二つ目は、僕たち若者が多くのことを学び、後世に伝えていく必要があるということだ。

今年は戦後八十年で、実際に戦争を体験した方たちからの生の声を聞くことができる機会はどんどん減っている。今後、現在より戦争を全く知らない人が増えていく。だからこそまずは今回の事業に参加して学んだことや考えたことを学校の仲間に伝えていきたい。

被爆地への中学生長崎市派遣事業レポート

富士宮市立富士宮第二中学校 佐野 琥太郎

◇見学地

- 出島和蘭商館跡 ○浦上天主堂 ○長崎新地中華街 ○大浦天主堂 ○平和記念公園
○国立長崎死没者追悼平和祈念館 ○如己堂 ○グラバー園 ○原爆資料館

◇印象に残ったこと

〈長崎原爆資料館〉

- 熱線で溶けてしまったガラスや橋に付いている看板が曲がっている現物が展示されていた。見るだけでも生々しく恐ろしく感じるが、それらを実際に触ることができたことが印象に残った。また、体は跡形もなく溶けて人の影だけが残った写真や、原爆ケロイドが発生している、見るも恐ろしい写真なども展示されていた。そして、その時だけでなく、現在もまだ苦しんでいる人たちがいるということも知った。

〈平和記念公園〉

- 平和記念公園には、青い男性の像、長崎平和祈念像がある。これは、核兵器の廃絶と世界平和への願いが込められたものだが、僕はこの像を見て、強く生きようとする姿や生きるエネルギーを感じた。

〈浦上天主堂〉

- キリスト教の教会で明治時代に作られたが、原爆により1945年に崩壊した。爆心地から500m離れていたが、224kgもある大きな鐘も落下し、壊れてしまった。これだけの鐘が落ちることがどれだけの威力だったかと驚く。

◇研修を通して感じたこと

- ・自分で想像していた以上に悲惨な状況だった。
- ・これまでに「はだしのゲン」を見たり、授業でも戦争の話を知っていたことも、実際に自分の目で見ることで、これほどまでにインパクトがあり、心に刺さるということを実感した。
- ・「百聞は一見にしかず」という言葉があるが、実際に行ったことは、自分の人生の中で最も印象に残る出来事となった。ぜひ、皆さんにも長崎や広島に実際に行き、自分の目で見て感じてほしい。



私たちにとって「戦争」とは？

自分たちは戦争と聞くとなかなか現実的に思い浮かばない。だが、世界には戦争によって多くの命が失われている。ウクライナ侵攻や中東の紛争など、現在も富士市富士宮市の人口の合計に匹敵するほどの人がなくなっている。

★自分たちは何をすべきか

「原爆の恐ろしさ」「戦争は誰も幸せになれない」ということを知り後世に伝えていけるようにする。



私たちは何をすべきだろう。

1. 「原爆の恐ろしさ」「戦争は誰も幸せになれない」ということを知る。
1. 僕たちが戦争について多くのことを学び、後世に伝えていけるようにする。

長崎派遣事業 報告書

「命の尊さ」。これは私が長崎派遣を通して学んだことです。

原爆資料館では、「皮膚がただれ落ち、全身が焼け焦げて亡くなった人」「親を求めて泣き叫びながら亡くなった子ども」「放射線で細胞が壊され、少しずつ命を奪われていった人」など、教科書では見られないような「死の恐ろしさ」にふれ、胸が苦しくなりました。

また、被爆者の松本美都恵さんのお話を聞いたときは、静かな語り口なのに言葉の一つ一つが心に深く残り、「原爆」というものが本当に逃げられない現実として迫ってきました。さらにガイドさんの「亡くなった人の名前を口にすることすらできなかった」という言葉から、当時の人々にとってどれほどつらいできごとだったのかが伝わってきました。

同時に、戦後八十年、日本が歩んできた「平和」についても考えさせられました。日本は日米安全保障条約のもとで、原爆を落としたアメリカの「核の傘」に守られてきました。アメリカに対する憎しみと、そのおかげで守られた平和への感謝。その両方の思いの中で私たちは生きているのだと知りました。

そして何よりも感じたのは、あの時代、祖国を思い、大切な人を守ろうとして命を失った人たちがいたからこそ、今の日本があるということです。戦争を「ただ愚かだった」と切り捨てることはできません。原爆資料館で見た「まだ生きたい」と思いながら亡くなった人たちの姿や、被爆者の方々から託された「命の尊さ」を無視することは、今を生きる私たちの誇りを失うことになると思いました。

私は、この派遣を通してはっきりと確信しました。それは「核兵器は絶対にあってはならない」ということです。理想がすぐに実現すると限りませんが、語りつぎ、訴え続けなければなりません。「長崎を最後の被爆地とする」という誓いを守るために。犠牲となった人々が私たちに残した「命の尊さ」を未来へ受けついでいくことこそ、残された者の役目だと思います。

過去から学び、今に生かし、未来へつなげる。その努力をやめてしまったとき、日本は大切なものを失ってしまうでしょう。だからこそ私は、今回の長崎派遣で学んだことを忘れず、核兵器廃絶の思いをこれからも伝えていきたいです。犠牲になった方々の涙と祈りを心に刻み、「命の尊さ」を次の世代へつないでいくために。

富士宮第三中学校 3年 高山 蒼介

〈出島和蘭商館跡〉

長崎の出島は江戸時代の鎖国をしている時に、唯一のヨーロッパとの交易場所でした。出島に付く前は相当大的な人工島かと思っていましたが、実物はかなり小さく最低限の生活ができる程度のものでした。ですが年に3回だけ出島を出ることが許されていることは初めて知りました。教科書でしか見たことないものを実物として見れて、外国と関係のある歴史的な建物に触れることができました。



〈平和祈念像〉

長崎平和記念公園にあるこの像は、高さが9.5mあり、とても大きかったです。この像の右手は「原爆の脅威」左手は「平和」
立っている足は「立ち上がろうとする力」顔は「犠牲者の冥福を祈る」という意味になっており平和の象徴のシンボルとなっています



〈原爆の脅威〉

原爆資料館では当時の様子を貴重な写真として見る事ができました。写真だけでは語れない原爆の恐ろしさがそこにはありました。また、被爆者である松本美都恵は中心地から2キロ程度離れた場所で被爆しました。原爆が炸裂した当初は音も、光も、今までに感じたことのないものであったため何がおきたからわからなかったと言っていました。中心から500mは完全に全焼し、1〜1.5kmはほぼ確実に即死したと言われています。長崎のほうが広島よりも威力は強かったが、土地が平らだったため威力を小さくできたと言っていました。だとしても、約7〜8万人もの犠牲者が出たことから原爆の恐ろしさが身にしみてわかりました。



〈大浦天主堂・グラバー園〉

大浦天主堂は現存するキリスト教教会の中で日本最古のものです。そして、世界でも類を見ない「使徒発見」が起こった場所です。当時はキリスト教が禁じられていたため、密かにキリスト教を隠し通してきた信者が、神父に信仰を告白しました。グラバー園はトーマス・ブレイク・グラバーがかつて住んでいた最古の木造洋風建築です。グラバーはキリンビールの設立にも関わった人物です。



無題

私が長崎派遣事業に行きたいと思ったきっかけは、戦争や原爆の被害やその後の復興の様子を詳しく知りたいという気持ちがあったからです。これまで、教科書やネットなどで、戦争に触れる機会はありませんでしたが、その情報だけでは理解できないことも多く、実際に目で見て感じて学びたいと強く思っていました。

戦争や原爆と聞くと広島を思い浮かべる人が多いと思います。ネットで原爆について調べてみると長崎よりも広島の方が多くヒットするのも事実です。私が長崎についてネットで調べたときも、詳しい情報はあまりでてきませんでした。この派遣事業では、実際に長崎に行って、五感で学ぶことができ、とてもいい機会になったと思います。

特に印象に残っているものは、資料館で見た灰になった弁当箱です。この灰になった弁当箱は、爆心地から約700メートルで被爆した当時14歳の堤郷子さんの遺品です。中にあったご飯はその後の火災で炭化してしまいました。郷子さんは当時、長崎市立高等女学校の学生でしたが、学徒動員の影響で、三菱長崎工業青年学校工場で働いていました。8月9日は、朝から空襲警報が出ていたため自宅で待機しており、その自宅で祖父母と共に被爆し即死しました。この弁当箱は、郷子さんの父親が遺体を探しているうちに見つけたものです。普段の生活を送るはずだったのに、突然得体のしれないものが落とされ、考える間もなく亡くなったということはとても想像がつきません。きっと、親御さんが作ってくれた弁当を楽しみに自宅で待機していたのではないのでしょうか。そんな中、食べることも許されず、戦争に対しての無念も晴らすことができず亡くなりました。たった一つの弁当箱からだけでもこれだけの物語やメッセージ性が伝わってきました。

戦争は、罪のない人々の当たり前で幸せな日常を奪う恐ろしいものです。弁当箱という何一つ変哲のないものでさえ恐ろしい姿に変えてしまいます。今後は、被爆者や戦争経験者の人数も減っていきます。私達若者が戦争について知り、後世に話を引き継ぎ、平和な世界を保つことが大切だと思います。実際に当時のものを見てみたり、当事者の話を聞いたりすることで戦争に対する見方が変わると思います。事実から目を背けず過去の過ちを繰り返さない世界を願います。

富士宮第四中学校 岩田 向葵

長崎派遣事業レポート

富士宮四中 岩田向葵

●永井隆●

カトリック信者であり、放射線医学者でした。

太平洋戦争末期に白血病により余命3年と診断されました。診断から2ヶ月後に原爆が投下されます。爆心地からわずか700mしか離れていない長崎医科大学付属医院本館2階のラジウム室で、これから始まる講義の準備中だったそうです。



原爆投下後は自分が重傷を負いながらも救護活動に励みました。病気で横になりながらも平和を想い、本を書き続けました。また、戦後の子どもたちに、心を豊かにするという目的で「うちの箱」を作りました。

原爆投下や病気によって自分も苦しい中、周りの人や将来のことを考え平和を願うなんて、きっと私にはできないと思います。永井隆さんのことをこの派遣事業で初めて知りました。もっと沢山の人が知ってほしいと思います。

●長崎平和公園●



もとは刑務所があった場所でした。また、原爆落下中心地で中心地標柱がたてられ、当時の地層も残されています。

平和祈念像のポーズには意味が込められています。右手は原爆の脅威を表し、左手は平和を願うことを表しています。右足は原爆投下直後の静けさ、左足は救った命や立ち上がろうとする力を表しています。公園内には平和の泉があります。原爆で水を求めながら亡くなった被爆者の霊を慰め、世界恒久平和と核兵器廃絶を願って作られました。

●長崎原爆資料館●

11時2分で止まった時計・被爆して破れた学生服・灰になった弁当箱・集まった折り鶴。



原爆が落とされた時間から進まない時計は、原爆によって世界が止まったこと、変わり果てたことを表していると感じます。被爆者が実際に見付けていたものが展示されることで当時の状況や被害が想像しやすくなりました。どこか現実味のない出来事という印象でしたが、実際の

の遺品を見たことで実際に起きたことという実感が湧きました。資料館に集まった折り鶴は平和への強い思いと犠牲者への追悼の象徴となっています。折り鶴は小学校や海外の団体など世界各国から集まっています。世界各国が平和を思っ折り鶴を折ってくれていることは、平和な世界への第一歩だと思います。

「自分ができること」

戦後八十年。今回の研修に参加する前までこの言葉をどこか軽く、他人事のように思っている自分がいました。幼い頃から、「火垂るの墓」や「この世界の片隅で」などの戦争を題材にした映画や本などを見たりと戦争について興味はあったのですが、どこか現実味が無くフィクションのような感覚で見えていました。しかし社会の授業などで戦争について詳しく学び、戦争経験者の方々の高齢化により戦争経験を語り継ぐ人が年々減っていることを知り、私達のような戦争を全く経験していない若い人たちが戦争について詳しく学び周りの人たちに広めていくことが必要なのだと感じ、他人事ではなくしっかり向き合おうと思い今回の研修に参加することを決意しました。

現地へ実際に訪れ、防空壕や原爆によって壊れたものが街中に多く残されていて、これほど栄えている街で八十年前実際に原爆が落ち、多くの人が犠牲となってしまったという現実をひしひしと感じました。また、長崎原爆資料館に訪れた際は、展示されている資料の多さだけではなく、資料に実際に触れることのできる展示や日本語、英語だけでなく中国語やハングルで語られている資料の説明を見て、多くの人が戦争の記憶を後世に語り継ぎ、日本以外に被爆国を作らせないという強い想いを感じました。

被爆体験講話では、お話の節々から原爆の恐怖、戦争の辛さを心から強く感じました。また、お話の中で、美味しい食べ物が何もなく、小学校二年生のときに初めてアイスクリームを食べたという話にとっても衝撃を受け、私達が普段当たり前に食べることができている食べ物が食べられなかった時代があることを痛感し、今の時代がどれほど平和なのかを知りました。

お話の最後には力強く「戦争で人を苦しめなるな。」「世界中の若者が深く考え、世界を平和に保つ方法を考えるべきだ。」「声を上げれば、戦争は避けることができる。」「とおっしゃっており、選挙に行くことの重要性を伝えてくださりました。戦争を終わらせるために多くの人に伝えようと難しいことをするのではなく、選挙や身近な人に伝える事が、戦争を終わらせる第一歩になるのだと感じたため、これからはまず、周りの人たちに今回聞いたお話や見た景色、そこから自分が感じたことを伝えようと思います。

【平和記念公園】

元々は刑務所で当時134名もの人がそこにいた
しかし爆心地から100m程しか離れていなかったため、全員が即死だった

原爆が投下されたあと、爆心地近くの地面の温度は
3000℃以上にもなっており、近くにいた人たちは体の水分が蒸発し人の形をした炭となってしまった

【平和祈念像】



右手は原爆の脅威を、左手は平和を表して
いて、軽く閉じた瞳は戦争犠牲者の冥福を
祈っている。



【浦上天主堂】

日本と外国との窓口であった長崎ではキリスト教の
宣教活動が他の地域よりも盛んであったため、教会が
多くあり浦上天主堂もその一つである。

また、爆心地から500m程しか離れていないため原爆
の悲惨さを伝える建物としても歴史的価値のある建物
である。

浦上天主堂の鐘は毎年8月9日、原爆が投下された時
刻に鳴らされるのだが、戦後80年となった今年、原
爆によって壊れてしまった鐘が復元され、双方の鐘が
鳴った。



「二度と繰り返さないために」

今は、終戦から 80 年もたっている。空襲や原爆という、一般市民にも被害が及んだ悲劇の歴史。なぜ起きてしまったのか、これから、二度と繰り返さないために、できることは何なのか、私は興味を持った。

終戦から、80 年たっているということは、戦争を経験した人が少なくなっている、ということだ。しかし、その人たちがいなくなってしまうたら、戦争の恐ろしさを知っている人がいなくなるかという、そうではない。だから、私たちが繋いでいかなければならないのだ。長崎平和記念公園には、各国の人々から送られてきた、平和を願う石像があった。有名なのは、平和祈念像で、左手は平和、右手は原爆の恐怖、ふせた目は被爆者への冥福を表し、細部に至るまで、作者の平和への強い思いが込められていた。平和の泉にある少女が、水を求めて苦しんだという言葉は、当時を鮮明に映しだしていて、心が痛くなった。

被爆体験者の話では、原爆が投下された時のことや、戦後の大変さを聞いた。やはり、戦時中だけでなく戦後も食べ物が少なくて、外国の臭いがする美味しくない米を食べたり、近所の農家さんの野菜を恵んでもらったりして暮らしていたそうだ。その方は、ご飯が美味しくないと言え、苦しい思いをしたと語った。現代で、好きなものが好きなときに食べられるのは、とても恵まれていると思った。

原爆資料館では、被爆者の着ていた衣服や、被爆した建物など、いろいろなものが展示されていた。その中でも特に目をひいたのが、長崎に実際に落ちた原爆のレプリカだった。始めに、圧倒的な大きさに驚き、次に、これが 80 年前に落ちたという絶望的な事実で絶句した。当時は、お昼前。お昼の準備をする人や、昼寝をしている人がいたと思う。その状況に、4000 度あまりの高温と爆風。日常の中に投下された、最悪の非日常。戦争を終わらせるために、原爆は必要だった、という人がいるが、私はそうは思わない。原爆を落として、結果的には戦争は終わった。だけど、最善策とは絶対に言えない。もっと平和的な解決ができたはずだ。私は、原爆被災地での経験を通して、戦争とは、話し合いで解決をせずに、武力で抑えようとするから起こってしまうものだと思った。原爆とは、様々な人の幸せな日常を奪うものだと分かった。起こってしまった悲劇は、二度と繰り返さない。そのために、話し合いで解決する努力をしたり、平和を望む人を選挙で選んだり、この経験を周りの人に伝えたりして、自分にできることからやっていきたい。平和を造り、守るのも壊すのも、人の手でできるのだとしたら、平和を造り、守る人になりたい。そして、そういう世界になっていかなければならない。



長崎レポート

富士根南中学校 3年 富士井 美風



「出島」



江戸時代にキリスト教の布教を行っていたポルトガル人を収容する目的で作られた。ポルトガル人は年に2回しか出島を出れなかったらしい。

「島」ってつくから、大きい！って思っていたから、小さくてびっくり。でも、「江戸時代の埋め立地」と聞くと、納得した。この小さい島に何人のポルトガル人が収容されたのか……

「畳と西洋の家具」

ポルトガルの人たちは、このような部屋に住んでいた。すごくシュールな部屋……おもしろい。



クリスマスを再現した部屋では、七面鳥や、ケーキなど、とても豪華。日本人女性が舞っていたり、ポルトガルの音楽隊がいたり、意外に楽しそう。

「実際に投下された原爆のレプリカ」



「時が止まった時計」



8月9日11時2分

長崎市に投下された原爆のレプリカ
名前は「フットマン」その名からわかるように圧倒的な大きさ。これが直径300メートルの火球となり、地表は4000度の高温になった、死者数は7万人と、膨大な数に言葉を失う。

美都江さんが小学2年生で、初めてアイスクリームを食べた。と言っていて、すごく驚いた。今は身近にあるものだからこそ、戦争の残酷さが伝わった。



「平和記念像」

右手・・・原爆の恐怖
左手・・・世界平和
ふせた目・・・被爆した人を冥福



作者の平和への強い思いが伝わる……



平和の象徴：はと
平和記念公園にいたよ
!! 😊

松本美都江さんのおはなし

3歳のときに被爆した。
たまたま、爆心地から遠い疎開先へ行っていたから、無事に生きている。今生きていることが奇跡のよう。戦後が大変だった。
○伝えたいこと
世界中の人が平和について考え、戦争をしない努力をしてほしい。
けんかは話し合いで解決してほしい。
選挙にはしっかりいって。

長崎に行って感じたこと

僕が長崎に行って感じたことは魅力がたくさんあるという事です。歴史や文化そして自然の美しさや食文化。様々な国の文化を感じました

長崎を語るうえで重要なのが複雑で多様な歴史です。鎖国中唯一の窓口であったため、日本のほかの地域とは少し違う文化が生まれました。そのなかでも私達がいった出島、グラバー園、大浦天主堂。

出島は1636年に完成した長崎市にある日本初の本格的な人口島で、江戸時代の鎖国政策下で日本と西欧とを結ぶ唯一の窓口でした。

グラバー園は日本の近代化に貢献した貿易商トーマス・グラバーの住宅を中心に複数の洋館が立ち並ぶ美しい庭園です。園内からは長崎港を一望できるきれいな景色が広がっていました。

大浦天主堂は日本に現存する最古の教会で江戸時代に潜伏キリシタンが信仰を守り続けた歴史に触れることができます。壁のステンドグラスがすごくきれいでした。

これらの場所を訪れて私は西洋文化がどのように日本に伝わり、日本文化とどのように融合していったのかを感じ取ることが出来ました。

次に食文化です。みなさん知っていると思いますが、カステラ、長崎ちゃんぽん、皿うどんなどが長崎では有名です。僕は長崎中華街に行き角煮まんじゅうを食べました。すごくおいしかったです！！有名な観光地でなく、コンビニで買ったおにぎりもなんだかおいしい感じがしました。

みなさんも知っていると思いますが、長崎市には原爆が落とされてしまいました。原爆や戦争について自分自身すごく興味があって、原爆資料館に行けること、被爆した方の話が聞けることが派遣事業に参加した一番の目的です。今は復興し、草木も生い茂っていますが、長崎市には70年は草木が生えないと言われていました。被爆した方の話をきいたとき、その人はこう言っていました。

「喧嘩が起こったらまず話し合いをするべき。選挙に行き平和を重んじる人に投票してほしい。」

この話を聞きもしケンカになってしまったら話し合いをしよう！選挙には絶対行こうと心に強く誓いました。

原爆資料館では目をそむけたくなるような現実の写真がたくさんありました。小さい子が丸焦げになっていたり、兄弟と別れてしまった子供、援助を待つ人々など…

中でもすごかったのが長崎に落とされた原爆の等身大（ファットマン）と、11時2分に止まった時計が置いてあったことです。原爆の等身大（ファットマン）。それはすごく大きく、とてつもない迫力でした。けれど、あの被害を出すには全く足りないと言っていいほど小さいです。この大きさであの被害が出たと考ええると、中に何が入っていたのか気になるし、恐ろしいなと思いました。11時2分で止まった時計は、止まっているのに人々の記憶を呼び覚ます。原爆投下の瞬間を刻み時を止めたまま、悲劇と静かに語り続ける永遠のシンボルだなと思いました。

僕が一番気になったのは、吹き上げる巨大なキノコ雲。「何が起きたのか、人々はどうなってしまったのか、雲の下の実態を知って下さい忘れないで下さい。伝えてください。」原爆資料館の入り口にこのような文章が書かれていました。

これを見て、私は平和は当たり前物ではないなとつくづく感じさせられました。この時代に誕生することができたから平和なだけであって、もっと今に感謝すべきだなと思いました。そしてもっと平和について考え、世界が平和になるように発信すべきだなと感じました。

長崎を訪ねて

富士根南中学校 3年 八木 かい

僕は戦争や原爆について興味があるのでそのレポートを作りたいと思います
長崎市には原爆が1945年8月9日11時2分に投下されました

長崎原爆資料館

原爆資料館の中でも有名なのが11時2分で止まった時計です
長崎のそらが白く光り
青空に大きな雲が吹き上げ、
時計が止まりました
入ってすぐに置いてあり入口から
異様な雰囲気がありました。
入る前から緊張して
すごく怖かったのを覚えています

また、
崩れた大浦天主堂の残骸
敗れた衣服
解けたガラス片が
今も静かに語りかけてきている気がしました。

被爆者が苦難を乗り越え語り継いできた
長崎からの平和のメッセージをこれからも私含めみんなで語り継いでいきます。

長崎を最後の被爆地に
核兵器のない未来に向かって世界の人々が手をつないで生きていく為に。
私たちは出来る事をする。

他人事ではなく自分事として
今に感謝しながら平和を訴えるべきだ。
と、この長崎の旅を通して感じました。
みんなで平和について再確認しましょう

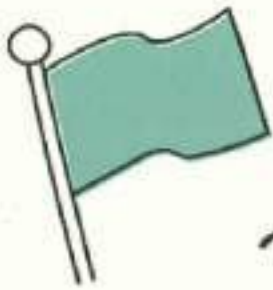
核兵器廃絶のために

私は今まで、戦争についてあまり考えたことがなく、「原爆で死者が多く出た。」それだけしか知りませんでした。しかし、現代の私達こそが知るべき悲惨な経験をした人たちの思いについて、この派遣事業を通して様々なことを学ぶことができました。

長崎原爆資料館では、当時の状況が残されていました。資料館の中には、原爆で壊れた時計や食器、当時の写真が多くありました。写真は、全身にやけどを負った被爆者の姿や救助を待つ人達の写真がありました。資料の中に、「何が起きたのか。人々はどうなってしまったのか。」という言葉がありました。原爆は、一瞬にして大きな被害を与えたのだと感じました。

また、実際に被爆した方の話を聞くこともでき、戦時中の状況を詳しく教えていただきました。その話の中で、私が特に驚いたことがあります。それは、「歩いたところが人の遺体の上だった。」という話です。原爆の翌日に外を歩いたときには、そこら中に遺体があり、人の遺体を踏みながら進んでいたそうです。なにかものが当たったと思ったときには、それが人の遺体の一部であったとおっしゃっていました。これを聞いて、戦争や原爆投下は絶対あってはならないと思いました。もし、自分がその時代に生きていて、家族を失っていたら、どれだけつらい思いをしていたのだろうと深く考えてしまいました。想像するだけでもひどく心が痛みました。展示された資料を見て、泣いてしまっていた観光客の方もいました。私はその思いに共感しました。それくらい、悲惨なものでした。

今、私は、当たり前のように寝て、ご飯を食べ、学校に行き、勉強したり、遊んだりしています。しかし、今回の派遣事業を通して今の生活が当たり前ではないことに改めて気が付きました。今ある生活に感謝することを忘れないように心がけていきたいです。同時に今回、実際に見聞きしたことで、核兵器が自分の想像よりも恐ろしいものであることがわかりました。まだまだ核兵器を所持している国はたくさんあります。これからは、今回学んだ核兵器の恐ろしさをたくさんの人に伝え、一緒に考えていく人を増やしていきたいです。そして、このようなことが二度と起こらないようにしていきたいです。



～長崎派遣事業レポート～

25/08/18～20

～1日目～

【出島和蘭商館跡】

扇形をしている。

江戸時代の欧州との貿易中心地
最後の建築物は、「旧出島神学校」
水門は、輸出側と輸入側がある。



旧出島神学校
The Former Dejima
Protestant Seminary



【長崎新地中華街】

美味しそうな中華料理店がたくさん！
他にもアイスなどたくさんの食べ物が出
揃っています♪

～2日目～

【平和公園 平和祈念像】

1955（昭和30）年完成 作：北村西望

意味

右手…原爆 目を薄めた顔…戦争犠牲者の冥福
左手…平和 左足を立てる…復興

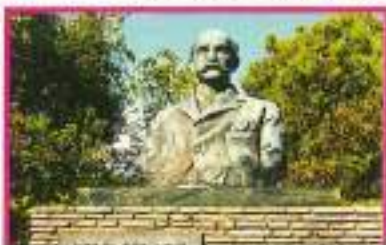


【長崎原爆】

- ・1945年8月9日11時2分に投下。
- ・約7万人が犠牲に。
- ・1km以内の人は100%死亡する威力をもつ。
- ・熱線による被害（落下点：3000～4000℃）
- ・放射線…最も大きな被害をもたらした。
- ・爆風…風速400m/秒ほど。

【グラバー園】

トーマス・ブレイク・グラバーが住んだ旧グラバー住宅がある。
グラバー園からは長崎市街を一望できる！



「戦争」

私はこの研修を行うまで、一度も原爆地には行ったことがありませんでした。だから、原爆は多くの被害を出した「危険な物」というくらいの認識で、原爆地は暗い雰囲気をしているとも思っていました。

長崎の平和公園を訪れて、目の前の光景に目を疑いました。想像していた場所とは大きく違い、静かで明るい雰囲気をした場所だったからです。本当にこの場所に原爆が落とされたのか、と思いました。

次に訪れた長崎平和資料館では目を逸らしたくなる原爆の悲修さを自身の耳や目、肌で感じました。

資料館に入ってすぐ、目に止まった言葉で一気に心が苦しくなりました。

「雲の下の実を、知ってください。忘れないでください。伝えてください。」

この言葉の重みが私の進む足を重くしました。また、中に展示されている人の丸焦げや被爆者が着ていた服、爆風で曲がった鉄骨、熱で溶けたガラスや瓦。全てが非現実的に見えて、言葉にできない複雑な感情になり、不思議な感覚になりました。他にも長崎に落とされた爆弾の模型や原爆と一緒に落とされた威力測定器などが展示されていました。長崎は原爆の威力実験に使われたということがわかり、とても悲しくなりました。この爆弾を作った人はどんな気持ちだったのか、なぜこんな非人道的なことができるのか疑問に思うこともありました。また、原爆に巻き込まれたら骨も残らない、とよく耳にしていたのですが、その意味もよくわかりました。原爆とは私の想像していたものよりもとても大きな被害を出した、何十倍も危険な「凶器」だったのです。

そして、この研修で被爆者の話を聞くという貴重な体験もすることができました。

お話をしてくれた人は当時三歳でまだ幼い年齢でしたが、当時の状況がトラウマのように脳裏にこびりついている。今になっても花火や飛行機がとても恐ろしい、と語ってくれました。

「もうこんな辛い思いをする人が出てほしくない。みんなの手で平和を保ってほしい。だから選挙に参加して信頼できる人を日本に立たせて下さい」と、お話の最後に言っていました。

今年は戦後から八十年です。八十年も前のことなんて、私たちからすれば非現実的だと思います。それでも、「自分に関係ない」と目を逸らすのではなく、被爆者たちの想いを私たちが繋いで、長崎を最後の被爆地にするために、現在起こっている戦争が核戦争に発展しない為に何ができるのか話し合うことが大切だと思いました。

～長崎の原爆地レポート～

平和記念公園



○平和記念像
平和を祈るために
つくられたが、原爆が
使われている。
[副] 天を指し、
「原爆の脅威」
[副] 水平に伸ばし、
「平和」
と天と水を表している。

大浦天主堂 (爆心から500m)



○500mと近づくと鉄
骨が土で埋められていた。
今は半分以上出ている
石は壊れてガラガラしている。

長崎原爆資料館



○原子爆弾の爆発
実物と同じ大きさ(14m)
になっている。
原子爆弾と同時に投下
された「原爆投下機」
の機体も展示されている。
原爆が投下されたことが
わかった。

如己堂



○博士が亡くなったとき
みえとみえとみえの家
を最期の家として
なかった。
[副] 如己堂を建てた
ことがわかった。

○作業服と戦闘服
大原爆心から1.2km
離れた作業服の服。
原爆がどれほどの
威力だったのか、
原爆の本物の恐ろしさ
を知ることができた。



○平和の泉
泉は山口県大分県
の一部が流れている。
水を引いた後、爆発
の雲に水を捧げて、
平和を祈る場所。



○公園内の石像
公園内には外国から
送られた17個の
平和を願う像が
モニュメントとして
置かれている。



博士の妻



自身が白血病に
なると、病状の研究
をした。

自分の体
験で研究した。

原爆体験講話

松本美都子氏 当時3歳

原爆心から約4km離れた場所
で被爆。

いろいろな話を聞くことができ、原爆が
与えた苦しみや悲しさをより深く理解することが
できた。 北山中学校 結城 結城



長崎市中学生派遣事業に参加して

私はこの夏、長崎派遣事業に参加しました。三日間という短い時間でしたが、教科書などでは知ることのできない現実と向き合うことができ、貴重な経験となりました。

原爆資料館では、当時の様々な資料が展示されていました。ぼろぼろになった服や、背中一面に熱傷を受けた少年の痛々しい写真などがあり、心が苦しくなりました。印象に残ったのは爆発の時間、一九四五年八月九日の十一時二分で止まったままの時計です。実際のものがこのように残っていることに驚くと同時に、長崎の日常が瞬間的に止まってしまったことを実感しました。

平和公園では、ガイドさんから話を聞きました。その中で一番印象に残ったのは、爆心地から百メートルの場所にある丘で、そこにいた人が全員即死したという話です。私は言葉を失いました。原爆は地上約五百メートルで爆発し、六千度の火球が生まれ、地面は三千度から四千度にもなったそうです。人間が生み出した放射線によって細胞が破壊され、白血病などの病気になった人も多くいたと知り、胸が苦しくなりました。

原爆で亡くなったのは兵士だけではなく、普通の市民もたくさんいたそうです。原爆が落とされた後は水を求めて川へ入る人がたくさんいました。ですが、川の水には油のようなものが浮いていたそうです。それでも飲んだという話を聞き、どれだけ苦しかったのかが伝わってきました。

被爆者の松本美都恵さんのお話も、強く心に残っています。松本さんは3歳の時に原爆を経験しました。当時は幼かったにも関わらず、鮮明に記憶に残っているそうです。突然の爆風、原爆が投下された後に母におんぶされて歩いた長崎本線、皮膚が焼けただれた人や、水を求めてさまよう人々。避難した防空壕で奇跡的におばさんと再会して、母親が泣いた話には、私も感動しました。想像以上に悲惨な状況で、電車の中で亡くなっていた人がいた話や、すねがちぎれて飛んできた話は衝撃的でした。

平和公園では、平和を祈る像や記念碑を見ました。像の作者は、「平和への思いを強く表したいから男の人にした」と話していたそうです。白い鳩は平和の象徴であり、鐘には「長崎」の文字が刻まれていました。高校生が核実験に反対して座り込みをしていることも知り、同じ若者としてすごいと思いました。

今回の長崎訪問を通して、私は「平和」について深く考えるようになりました。核兵器は絶対に使ってはいけません。戦争で人を苦しめてはいけません。当たり前のように思えますが、絶対に心にとどめておかなければならないことです。そして、何かあった時は、話し合いで解決する努力が必要です。世界中の人が、深く考え、世界を平和に保つ方法について話し合うべきだと思います。

戦争や原爆で苦しんだ人がたくさんいるのに、同じことを繰り返してはいけません。「戦争を経験してないから分からない」と言って、考えることを放棄してはいけません。今私たちが教育を受けられていることや、おなかいっぱいにご飯を食べられること、元気に生活できていることに感謝して、毎日を大切に過ごすべきだと感じました。

今回、私は命の重さ、平和の尊さを深く学びました。私たちが今こうして学び、語り継ぐことが、未来の平和につながると信じています。長崎での三日間は、私にとって「平和を守る責任」を教えてくださいました。学んだことをこれからの人生に活かし、平和の大切さを周りの人にも伝えていきたいです。そしてこれからも、その学びを途切れさせることなく、周囲に伝え続けていきたいと思っています。

🌸 長崎への派遣事業

令和7年8月18日(月)～8月20日(水)

西富士中学校 3年 村松天子

はじめに



この長崎訪問を機に、戦争や平和について深く学ぶことができた。実際に現地を歩き、見て、聞いて、戦争を身近に感じることで、教科書だけでは知ることのできない多くのことを学ぶことができた。長崎は、1945年8月9日に原子爆弾が投下された場所であり、今もなおその記憶を大切に守り続けている街である。被爆者の方の話を聞いたり、平和祈念像や資料館を見学したりする中で、戦争の悲惨さと平和の尊さを肌で感じることができた。また、長崎の歴史や文化、食べ物にも触れることができ、心に残る貴重な体験となった。

被爆者体験講話

松本美都恵さんより、3歳の時の被爆体験時の話を聞いた。家族は長崎駅の近くに住んでいて、空襲の後に小屋を借りて避難していた。爆発の瞬間の記憶はなく、気づいたら防空壕の中で母と泣いていた。皮膚が焼けただれ、幽霊のような姿で歩いていた人々、水を求めて川に入る人、電車の中で焼けて亡くなった人など、想像を絶する光景が語られた。弟を焼き場に運び、順番を待って並んでいたという話もあった。戦後は何もなく、食べ物も味がわからないほどで、バラックでの生活が続いた。それでも人々は生きるために努力し、家族を守ろうとしていた。想像以上に悲惨な状況が語られたので、衝撃を受けた。



原爆の被害と平和への祈り



長崎の原爆は地上約500メートルで爆発し、爆心地から100メートル以内の人々は即死した。地面は最大4000℃、火球は6000℃に達し、町は一瞬で焼き尽くされた。犠牲者の多くは兵士ではなく一般市民だった。浦上天主堂の鐘や噴水、白い鳩の像は、水を求めて亡くなった被爆者への祈りと平和の願いを込めてつくられた。被爆時、人々は油が浮いた汚い水でも飲んだ。



出島と歴史の学び

江戸時代に造られた扇形の埋め立て地で、鎖国中に唯一外国との貿易が許された場所。年に2回だけ出入りが認められ、オランダとの交流を通じて文化や技術が伝えられた。現地で模型や資料を見て、限られた条件の中でも世界とつながろうとした人々の努力に感動した。



長崎の味も体験

名物の「皿うどん」と「角煮まんじゅう」を食べた。バリバリの麺にあんかけがかかった皿うどんはとても美味しかった。角煮まんじゅうはやわらかい豚肉がふわふわの皮に包まれていた。



おわりに

長崎での学びを通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを深く感じた。被爆者の話や記念碑から、命の重みと家族の絆を知り、平和を守ることの大切さを実感した。これからは、学んだことを忘れず、争いのない未来のために自分にできることを考え、行動していきたい。

無題

平和記念公園についたとき、私は生まれて初めて本物の戦争の恐ろしさというものを感じました。

戦後八十年の節目として、私たちは市長の提案で長崎へ派遣事業として行って来ました。私の中で、原爆と聞けば”広島”のイメージが強かったため、長崎に落とされた原爆のイメージがあまりありませんでした。私と同じように、原爆＝広島と思っている子どもも多いのではないのでしょうか。

しかし、長崎での研修を終えた今となっては、広島だけでなく長崎の原爆のことも知るべきだと感じています。かつて、原爆が落とされた二箇所では、どちらも同じことが起こったわけではありませんが、どちらも苦しい悲惨なことが起こったことには変わりありません。だから長崎のことも、もっと広まってほしいと思っています。

そのことは、現地ガイドさんの話を聞いて強く感じました。平和記念公園に建っている平和祈念像。毎月9日に鳴らす原爆でなくなった人を供養する長崎の鐘。「平和」を世界に伝え続けた永井隆博士。原爆の熱線で溶けたガラスや石。現地のガイドさんは何十回、何百回も同じことを伝え続けたはずなのに、ガイドさんは当時起こったこと、その後の人々の生活のことを、丁寧に一生懸命教えてくださいました。

ガイドさんの話を聞いているうちに、長崎でも、広島でも同じような恐ろしいことがあったのだと思いました。しかし、まったく同じことではないと感じました。長崎には長崎の平和をつなごうとしている人がたくさんいます。また、広島にもそういった人がたくさんいるはずです。長崎と広島、それぞれの思いが積み重なってきて、今の平和があるのだと感じました。そう考えているうちに平和記念公園についたときの恐怖はなくなっていました。

今、私達が平和の中で生きているのは戦争や原爆の恐ろしさを伝える人、平和を願う人がたくさんいるからだと感じ、そう考えると胸がなんだか熱くなりました。

だから、私は広島だけでなく長崎で起こったことについて理解を深め、原爆の事自体をもっと詳しく知り、長崎で自分の目を見て原爆の悲惨さを感じてほしいです。

この世から戦争がなくなることを祈っています。

井之頭中学校 3年 宮島 和花

大浦天主堂

正式名称 日本二十六聖殉教者聖堂

1862年、二十六人の殉教者たちが処刑十字架に掲げられたことを受け、捧げられた教会。



グラバー園

幕末から明治期にかけて、長崎の近代化に貢献したグラバーさんをはじめとした実業家たちの旧邸宅や、当時の洋風建築を移築・復元した屋外の博物館。洋風な建物が連なり、咲いている花も相まって、外国を強く感じられる場所でした。

長崎平和記念公園

1945年 8月9日 11時2分長崎市の小高い丘の上でプル

トニウム原子爆弾が爆発した場所。ここには平和祈念像が建っており、左手は「世界の平和」、右手は空に向けていて「原子爆弾」のことを示している。世界各地からもモニュメントが寄贈された。

ここは当時刑務所であり、日本人だけでなく中国人や朝鮮人などもいたという。

毎月9日には長崎のかねを鳴らし祈りを捧げているという。



長崎原爆資料館

長崎の原爆のことに加えて世界の戦争のことも展示されていた。爆弾の爆風で止まったままの永遠の11時2分の柱時計や、放射線による人への影響などの展示があった。熱線で変形したやかんやガラスも展示されており、原爆の恐ろしさがよく分かる博物館だった。



永井隆記念館

被爆後の長崎で救護活動や復興に尽力し、また「この子を残して」や「長崎の鐘」などの本を書いた。

「如己愛人」と「平和」というメッセージを世界に届け続けた永井隆博士の精神と偉業を記念し建てられた。

記念館前には、被爆後に永井隆博士が住んでいた如己堂があり、二畳しかなかった。そこに家族3人で住んでいた。被爆した当時の長崎では立派な家だったという。



出島和蘭商館跡

出島別名扇島、島全体の形が扇形になっている。広さは約1万5000㎡歩くとそこまで広くは感じなかった。

人と物資の入口は別々になっており、出島から小舟で出入りしていた。

物資の入口には大きな秤がおいてあり、物資をすぐに図れるようになっていた。



「平和へのバトン」

私は今まで、戦争について深く考えたことはありませんでした。広島と長崎に原子爆弾が落とされ、多くの人の命を奪ったこと、二度としてはいけないことというのは知っていました。終戦から80年たった今年、戦争を経験した人は非常に少なくなってきました。今回派遣事業に参加するきっかけになったのは、祖母に曾祖父のことを聞き、知りたくなったからです。曾祖父は爆心地から2.3キロの場所で被爆し、命は助かったけれど全身火傷だったこと、お腹から腸が飛び出し引きずっている人などが多くいて地獄絵図だったことなどを話していたそうです。

2日目に長崎原爆資料館などへ行き、被爆体験講話を聞きました。原爆資料館では、自分の普段の生活からは想像できないような写真を見たり、熱線により変形してしまった生活用品、洋服などを見たりしました。その中でも、作業服や戦闘帽、子どもの洋服などの展示が特に印象的でした。熱線によって、服がこうになってしまうのかと、見ていて心にぐっとくるものがありました。

放射線によって原爆ケロイドという運動障害などを起こした人もいたそうです。また、1キロ以内で被爆した人で無傷であっても多くの人が死亡したり、胎内被爆者や被爆二世にも大きな影響があったそうです。実際に写真も展示してありましたが、私が想像してた以上に酷い症状で写真をずっと見ていることが出来ませんでした。

講話体験で特に印象に残っている話は、講話をしてくださった松本さんが言っていた、世界中の若者が深く考え、「世界を平和に保つ方法について話し合うべき」ということと、「選挙には絶対に行って欲しい」ということです。選挙に行くことで戦争をしない、反対するような候補者を選ぶことが戦争をしないことにつながると話していて、そういう些細なことが関係してくるんだなと驚きました。

また、今回の研修では、中華街や出島などにも出向き、今の長崎が外国の文化も融合した平和な街だと実感しました。私は今まで、授業やテレビで見て、戦争のことを全て知っている気でいました。しかし研修を終えて、戦争は二度としてはいけないことというだけではなく、松本さんも言っていたように、若い私たちが戦争のことについてもっと知る必要があると思いました。私も今回の派遣事業に参加しなければ戦争について深く知ることはできなかったと思います。まだまだ知らないことも沢山あるので、これからも日本人としてたくさんの知識を身につけ、戦争や原爆の悲しみ、命の大切さ、被爆された人の気持ちを自分の言葉で伝えていきたいです。自分が当たり前のように幸せな生活が送れているのが普通ではなく、感謝しながら生活する必要があると思います。このような悲惨なことを二度と起こさないために、日々、当たり前のように生活出来ていることに感謝し、自分ができることはしっかりすることで、平和のバトンを受け継ぎ、繋げていきたいです。

長崎市への派遣事業レポート

令和7年8月18日(月)～8月20日(水)

1日目

出島和蘭商館跡



カピタン館屋

オランダ商館長(カピタン)の事務所や住居として使用されていた出島で最も大きな建物。2階は、クリスマスをお祝いする席などが再現展示されている。

旧出島神学校

1878年に建てられた、現存する日本最古のキリスト教(プロテスタント)の神学校。1階には休憩室などがある。



長崎新地中華街

横浜、神戸と並ぶ日本三大中華街の一つ。江戸時代中期に中国からの貿易品の倉庫を建てるために海を埋め立てて造られた。

角煮まんじゅうがトロトロでおいしかった!!



2日目

平和公園



長崎原爆資料館

「原子爆弾による被害の惨状」を後世に伝え、核兵器の廃絶と「世界恒久の平和の実現に寄与する」ことを目的として設立された。実際に自分の目で被爆による被害、爆風による被害、長崎原爆投下までの経過などを見て今回感じたことを周りに伝えていきたい。



平和祈念像

彫刻家北村西望代による青銅製の像。天を指した右手で「原爆の脅威」を水平に伸ばした左手で「平和」を強く願った目で戦争犠牲者への深い追悼と、冥福を祈る気持ちを表現している。



大浦天主堂

日本に現存する最古の教会建築。信徒の密告を避けるため、弾圧を避けて信仰を守り続けた潜伏キリシタンが宣教師に信仰を告白した「信徒発見」の舞台となった。

国立長崎死没者追悼平和祈念館



原子爆弾の投下により亡くなった全ての方々に追悼し、永遠の平和を願う場所。遺影や体験証言書などを閲覧、視聴することができる。

グラバー園

日本に現存する最古の木造洋風建築である「旧グラバー住宅」をはじめとする国の重要文化財に指定された3棟の洋館と6棟の洋風建物の、長崎を一望できる絶景、季節ごとに異なる花々が咲く庭園がある。



〈被爆体験講話の受講〉

松本 美都恵さん

長崎県民の近くに自宅があった5人家族

世界中の若者が深く考え、世界を平和に保つ方法について話し合おう

「戦争」について

僕は今回、長崎の被爆地派遣事業に参加し、実際に被爆地を訪れるという貴重な体験をしました。これまで授業や映像を通して原子爆弾の恐ろしさについて学んできましたが、現地で自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じたことは想像をはるかに超えており、心に深く刻まれました。

最初に訪れたのは平和公園です。原爆が投下された爆心地の近くに立つ「平和祈念像」は、写真で見る以上に大きく迫力がありました。天を指さす右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を象徴していると説明を受けました。祈りの姿勢を見ていると、作者の「二度と戦争を繰り返してはならない」という強い思いが伝わってきました。像の前に立つと、平和を守るのは他人任せではなく、私たち一人ひとりが考え行動しなければならないのだと強く感じました。

続いて原爆資料館を見学しました。そこには被爆直後の街の写真、熱線で焼け焦げた衣服などがありました、映像や本で見たことはありましたが、実物を目の前にすると衝撃の大きさが全く違いました。たった一発の爆弾が街を壊し、多くの命や未来を奪ったと思うと、言葉を失いました。特に、幼い子どもが犠牲になった写真は胸を締めつけ、原子爆弾の残酷さを改めて思いしらされました。

また、被爆者の方から直接体験を聞くこともできました。幼い頃に被爆しながらも懸命に生き抜いたお話は、教科書には載っていない「生の声」として心に響きました。その方は、「戦争で人を苦しめるな」と語られました。その言葉の一つ一つには重みがあり、平和への思いを次の世代に引き継ぐ大切さを実感しました。

今回の派遣事業を通して、僕は「平和は決して当たり前ではない」ということを学びました。学校へ通い、友達と笑い合い、安心して暮らせるのは平和があるからこそです。しかし、世界では今も戦争や紛争に苦しむ人々がいます。長崎で学んだことを自分の中にとどめず、家族や友達に伝えることが大切だと感じました。小さなことでも、それが未来を変える一歩になるかもしれません。

僕たち中学生には社会を大きく動かす力はまだありませんが、人との関わりで思いやりを大切にし、争いではなく対話で解決する姿勢を学ぶことはできます。

平和の尊さを心に刻み、一人の中学生としてできることを探し続け、平和な社会をつくる一人になれるように努力していきたいです。



長崎市派遣事業レポート

出島



鎖国時代にキリスト教の広がりを抑えるためにオランダ人などを収容する目的で造られた。現在は国の史跡に指定されている

平和記念公園

平和祈念像の周りには水がいつも流れている
右手は空を指して原爆の恐ろしさ、左手は平和、閉じた目は犠牲者の冥福を祈っている

平和祈念像



平和の泉



原爆資料館



被爆体験講話 松本さんのお話 当時3歳
昔はパンもお菓子などもなく節分の豆を食べていた。今大事なことは…

- ・世界中の若者が深く考え世界を平和に保つ方法について話し合うべき
- ・二度と戦争をしないように努力すること
- ・核兵器は絶対に使用しないこと
- ・戦争で人を苦しめるなということ

グラバー園



旧グラバー住宅は現存する日本最古の木造洋風建築であり国の重要文化財でもある！ここからの景色はとてすごい！

派遣期間 令和7年 8月18日～8月20日

平和の泉は原爆で水を求めて亡くなった犠牲者のために造られた。泉の正面には当時の惨状を伝えるためにある少女の手記が刻まれた石碑がある。

伝えるべきこと

私は戦争についてあまり深く考えたことがありませんでした。日常ではニュースなどでしか触れることがなく実際にどんなものかを知りませんでした。今回派遣事業に参加し、長崎を訪れたことで戦争の悲惨さを実感しました。

特に心に残ったのは、被爆を受けた方のお話を直接聞いたことです。その方は原爆投下当時わずか3歳で幼い子どもまで大きな被害を受けたことに強い衝撃を受けました。原爆が落とされた瞬間目を開けられないほどの閃光と爆風が襲い周囲の木々は瞬く間に燃え上がったそうです。爆心地から200メートルでは2000度もの熱が発生し人々は皮膚がただれたまま水を求めて歩いたと聞き言葉を失いました。情報だけでは分からないことを知れたのは貴重な体験でした。

原爆資料館では当時の様子を示す展示が多くありました。特に背中一面に熱傷を負った少年の写真や、幼い子どもの黒く焼けた服は強く印象に残りました。実際に目にしたとき頭の中が真っ白になるくらい、惨状を想像し胸がしめ付けられました。

戦争体験者が年々減っている今、私のように戦争についてくわしく知らない世代が増えています。だからこそ今回学んだことを身近な人に伝えたり平和について発表したりと、自分にできることを考え行動していきたいと思います。また、戦争を乗り越えてきた人たちのおかげで今の「当たり前」の生活があることに感謝し、毎日を大切に生きていきたいです。

大富士中学校 1年 渡邊 友彩



被爆地への派遣事業

令和7年 8月18日～8月20日

←----- Let's Go



GOAL



Day 1 <中華街>

中国貿易が盛んだた
ため、中国人の居留地
が形成され始めた。
パンダのものや中華
街らしい食べ物もあ
って楽しかったです



右手で上を指している
のは、原爆へのおそ
うしで左手は現在と
未来の平和の意味
でこのポーズにしてい
て、平和を願う力強さ
を感じました。



<大補天主堂>

みんなでお揃いの
グラバーベア

Kawaii



スタンドグラスが
きれいで感動しました。

Day 2 <平和記念像>

yummy



建物がくずれていた
りガベや爆風での被害
などが再現されてい
て当日の様子を想像
させられました。

<原爆資料館>

当時の人の生活
や戦争の怖さや
原爆の熱で焼
けこげた服を
見て、おそろし
さを感じました。



グラバー園

「忘れてはいけないこと」

私はこの派遣事業を通して、戦争に対する考え方が大きく変わりました。

長崎原爆資料館で、原爆による被爆の体験をした方から直接お話を伺う機会をいただきました。その方は、三歳の時に被爆した松本美都恵さんです。それまで私は、「戦争なんてやってはいけないこと」だと思っていました。でも、松本さんの語る一つ一つの言葉に耳を傾けるうちに、心の中で何かが変わっていくのを感じました。

1945年8月9日、長崎に原爆が投下されました。一瞬にして約14万人もの命が奪われました。爆心地の温度は6000から7000度にも達したと言われていいます。強烈な光と爆風が街を襲い、数えきれないほどの人々が命を落としました。

松本さんが語った中で、特に印象に残っている言葉があります。

「被爆した人々は、腕の肉がはがれ落ちてしまい、おばけのような姿で歩いてきた。」その姿を想像するだけで、胸が締めつけられました。どれほどの痛みと苦しみだったのか、言葉では言い表せません。私は、日常を一瞬で壊してしまう原爆を絶対に許してはいけないと強く思いました。

資料館の展示室では、原爆が炸裂した瞬間を物語る品々がたくさん並んでいました。11時2分で止まったままの時計、溶けて形を失った硬貨、ガラスが突き刺さった作業衣。それらは静かに、しかし力強く原爆の恐ろしさを語っていました。

派遣事業に参加する前の私は、「戦争なんて言葉は聞きたくない」と思っていました。でも、松本さんは、「戦争も原爆も、絶対に忘れてはいけない。」と語っていました。それは、自分と同じような悲しみを誰にも味わってほしくないとい強い願いからです。だからこそ私たちはこの体験を次の世代へと伝えていかなければなりません。

今、私たちが楽しく過ごせている日々は、決して当たり前ではないのです。松本さんはこうもおっしゃっていました。

「世界中の若者が平和について語り合い、戦争をしない努力をしてほしい。核兵器は絶対に使ってはいけない。そして、自分たちの未来のために選挙に行ってほしい。」

私たちにできることは、決して大きなことばかりではありません。でも、小さな行動を積み重ねることで、世界の平和につながっていくと信じています。

この体験を通して、私は「平和を守る一人」として、これからもできることを探し、行動していきたいと思います。

被爆地（長崎）を訪れて…

芝川中学校 2年 望月美愛

80年前、長崎に投下された原子爆弾。当時起こった現実を知り衝撃を受けました。また、戦争以前の開港の歴史も学ぶことができました。豊かな外国文化も取り入れ、平和だった日本がなぜ戦争をすることになってしまったのか…。それを思うと、余計に戦争のおろかさを感ぜずにはいられません。これ以上の悲劇を繰り返さないことを強く心に刻み、今後の人生に生かしていきたいと思いました。



長崎原爆資料館…被爆資料や被爆の惨状を示す写真などが展示されている。



『11時2分を指して止まった時計』

爆心地より南へ約2.8kmの元船町の民家にあったもので、爆風で損傷した。原爆投下の時刻である11時2分を指して止まっていた。

『作業服と戦闘帽』

爆心地より約1.2kmの三菱長崎製鋼所で被爆した作業員の作業服。熱線の直射を受けた部分が焼け焦げている。



長崎市永井隆記念館…長崎市名誉市民第1号・医学博士「永井 隆さん」の自筆の原稿や書画、

遺品などが展示されている。

永井隆さん（明治41年2月3日生まれ、昭和26年5月1日亡くなる。43歳）



※1

長崎医科大学（現在の長崎大学医学部）で放射線医学を専門としていた医学博士。隆さんは、医師を目指して長崎医科大学に入学、卒業後は放射線科医として働き始めた。日本での放射線医学の普及と発展のために日々研究や患者の診察を続けた。昭和20年6月に慢性骨髄性白血病で「余命3年」と診断。そして、その2ヶ月後に原子爆弾に被爆する。原爆によって妻を亡くし、みずからも重傷を負ったが、無事だった医師や看護師たちとともに、被災者の救護活動を2ヶ月間行った。やがて白血病が悪化し、寝たきりとなってからも「長崎の鐘」や「いとし子よ」など多くの著作を通じて、人々に生きる勇気と希望をあたえ、戦争のおろかさや平和と命の大切さを訴え続けた。

原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から！

“原子野に伏して”『平和塔』より

旧グラバー住宅…世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産



※2

スコットランド出身の商人トーマス・グラバーが、親子二代に渡り暮らした、現存するわが国最古の木造洋風建築。最初の主人であるトーマス・グラバーは1859年（安政6）21歳の時に長崎へ来航し、居留地として定められた南山手に自宅を建てた。文久3年（1863）に建設された当初から、居留地で最も美しく立地条件の良い家であった。日本瓦や土壁（漆喰）が使用され、広い石畳のベランダにかかるアーチ型の欄干が印象的である。また、屋根の煙突と瓦ぶきの組み合わせもユニークだと感じた。グラバーは大きな松の木のすぐ横に建てられた自宅に「IPPONMATSU」という愛称をつけ、周囲からも「一本松邸」と呼ばれた。

【画像引用元】 ※1 <https://nagaitakashi.nagasakipeace.jp/japanese/stories/8.html>

※2 <https://glover-garden.jp/about/>

「戦争の恐ろしさ」

私は、今回の派遣事業に参加するまで、戦争や原子爆弾については学校の授業や教科書で学んだことしかありませんでした。「原爆は恐ろしいもの」「たくさんの人の命が奪われた」ということは知っていましたが、それがどれほどの悲劇だったのか、本当の意味では理解できていなかったと思います。

派遣事業の二日目に、長崎原爆資料館を訪れました。入口に入った瞬間、まるで別の世界に入ったような感覚になりました。最初に目に入ったのは、一つの古びた時計でした。時計の針は十一時二分を指したまま止まっていました。原爆が落とされた時刻を示していました。この時計は爆心地から約八百メートル離れた民家にあったそうで、私の家から学校までの距離と同じくらいです。その距離でもこんなに被害があるのかと、原爆の威力に驚きました。

次に見たのは、被爆直後の長崎の街を再現した写真や、地形の模型です。天井からのモニターに火球や熱線、爆風、火災、放射線などが広がる様子が映し出され、一瞬で町が崩壊する様子が分かりました。現実とは思えないような光景に、ただただ言葉を失いました。展示されていた「ファットマン」と呼ばれる原爆の模型も印象的でした。小さな金属のかたまりが、たった一発であれほど多くの命や街を奪ってしまったことに衝撃を受けました。

さらに進むと、被爆者の遺品である黒こげになった弁当箱や溶けた瓶、焼け焦げた衣服などが展示されていました。一部の展示物は実際に触れることもでき、目で見ただけでなく、肌で戦争の悲惨さを感じることができました。写真には、全身にやけどを負った人たちや、包帯でぐるぐる巻きにされた子どもたちの姿が写っており、胸が苦しくなりました。

原爆を体験された方のお話も聞きました。幼くして家族を亡くしたつらさや、当時の混乱の中で必死に生きようとしたお話には、涙が出そうになりました。外国人の方が展示を見て涙を流している場面も目にしました。その姿を見て、原爆を落とした側も、これほどまでに大きな被害が出るとは思っていなかったのかもしれない、と考えさせられました。

今回の派遣事業では、原爆資料館での展示や、平和公園でのガイドさんの話、そして被爆者の方のお話など、たくさんの学びがありました。どれも教科書だけでは決して知ることのできない、重く大切なものばかりでした。戦争の記憶が少しずつ薄れていく今だからこそ、私たちがそれを学び、語りついでいくことが必要だと思います。

そして私は、平和の大切さを改めて実感しました。今の平和な毎日が当たり前ではなく、多くの犠牲と苦しみの上に成り立っていることを忘れず、一日一日を大切に生きたいと思います。この貴重な経験を、これから自分の言葉で周りの人に伝えていきます。

出島



当時の出島を再現した建物が並んでいました。特に印象に残ったのは「ミニ出島」です。建物の細かい部分まで丁寧に再現されていて、当時の様子を詳しく知ることができました。当時の技術力の高さに驚かされました。さらに出島の人々は簡単に外に出ることができなかったと知り、限られた空間での生活がどんなものだったか知りたくなりました。



長崎新地中華街



横浜の中華街とは少し違った雰囲気があり、長崎ならではの魅力を感じました。長崎の中華街は歴史が古いそうです。カラフルで派手な建物が並び、普段見かけないようなものがたくさんあって、とても楽しく見学することができました。

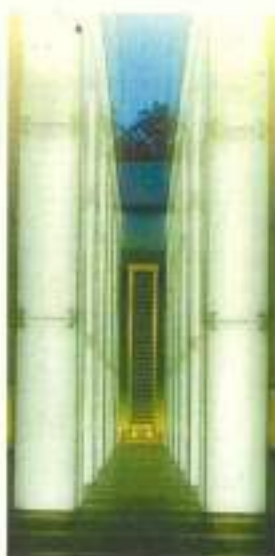
長崎原爆資料館



爆心地から約800メートル離れた民家にあった時計が展示されていました。その距離は、ちょうど私の家から学校までと同じくらいで、こんなに離れていても被害を受けるのかと驚きました。時計の針は、原爆が落とされた11時2分を指したまま止まっており、その場の空気はまるで時間が止まっているかのように感じられました。

被爆者の遺品や当時の写真が数多く展示されていました。一部の展示物には実際に触れることもでき、よりリアルに戦争の悲惨さを感じることができました。原爆「ファットマン」の模型もあり、小さな金属の塊が一瞬で街や人々の命を奪ってしまうことに、強い衝撃を受けました。観光に来ていた外国人の方が涙を流していた姿を見て、原爆を落とした側も、これほど大きな被害が出るとは思っていなかったのかもしれないと考えさせられました。

平和記念館



実際に被爆された方のお話を聞くことができました。話の中で、今では当たり前のように食べているソフトクリームが、当時はとても貴重だったというエピソードがあり、身近なことから当時の苦しさやつらさを感じることができました。お話を聞きながら涙が出そうになるほど、心に残る時間でした。同じことが二度と繰り返されてはならないと、改めて強く思いました。

浦上天主堂



中にはいろいろなステンドグラスでデザインされた窓がありました。いままでステンドグラスを見たことがなかったので、その綺麗さに見とれてしまいました。

被爆地長崎への中学生派遣事業に参加して

私は長崎を訪れ、被爆地や資料館、浦上天主堂などを見学しました。その中でまず強く心に残ったのが、永井隆博士の言葉「己のごとく人を愛する」でした。この言葉は、自分を大切に思うのと同じように、他人を思いやり大切にしろという意味です。博士は原爆で被爆し、さらに白血病で寝たきりの生活を余儀なくされながらも、人々のために尽くしました。わずか二畳の部屋で十七冊もの本を執筆し、私財を投じて子供たちのために「うちの本箱」という図書室を作りました。苦しみの中にあっても人を思う博士の姿から、「平和の原点」とは他人の痛みを自分のことのように感じ、支え合う心にあるのだと学びました。

被爆の体験を語る語り部の方のお話も、強く胸に残りました。その方の母親は、子どもが戦争中の粗末な食べ物を「好き」になってしまったのを見て、「戦争は絶対にしてはいけない」と感じたといいます。祖母は、爆心地から逃げてくる人々の姿を「皮膚が垂れ下がり、ゾンビのようだった」と語りました。家を失った人々が、わずかな食料を抱え、墓場で夜を過ごしたことも聞きました。こうした生々しい証言は、戦争が人間の生活と尊厳をどれほど破壊するかをはっきりと伝えてくれました。戦争と原爆は、人生を深く傷つけ、長く心に影を残すものだと感じました。

訪れた浦上天主堂は、「二つの悲劇が交差する場所」として忘れられません。江戸時代、信者たちは絵踏みを強いられ、信仰を守るために苦しみました。その土地に建てられた天主堂は、やっと信教の自由を得た証でした。しかし完成からわずか二十年後、原爆によって壊されてしまいました。信仰の自由の喜びを得たはずの場所が、再び悲劇の舞台となったのです。現在の天主堂には、当時の瓦礫や落ちた像の一部が残され、過去を語り継いでいます。信仰と平和は、どちらも人々の命に深く関わるものであると改めて感じました。

長崎の「坂の町」という地形は、爆風や熱線の広がり方に影響し、谷間の地区は壊滅的な被害を受けました。実際に長崎の町を歩き、こうした地形までが悲劇に関わっていたこと、長崎の被爆がいかに特別であったかを実感しました。

今回の学びを通して、私は平和とは遠い世界の話ではなく、私たち一人ひとりの生き方に根ざしていると強く感じました。永井博士の言葉のように「己のごとく人を愛する」ことは、日常の人間関係や社会の中でも実践できるはずです。長崎の人々が伝えてくれた苦しみと願いを忘れずに、私はこれからも平和について考え、語り継いでいきたいと思います。

星陵中学校 3年 本多恭一郎

テーマ：浦上天主堂の二つの悲劇と「己のごとく人を愛する」

今回訪れた長崎にある浦上天主堂は、日本における「キリスト教自由」の象徴で、同時に「原爆」という日本の近代史に刻まれた深い悲しみを抱えた場所でした。

ここには「信仰の自由」と「平和の尊さ」という二つの物語が重なっています。

1. 二つの悲劇

ひとつは、江戸時代から明治にかけて続いたキリスト教迫害です。浦上の人々は信仰を守るために拷問や流刑に耐え、命を落とした人も少なくありません。信じることの自由を奪われたその歴史は、心の自由の尊さを教えてくれます。

もうひとつは、1945年8月9日の原爆投下による被爆です。当時やっとの思いで建てられた浦上天主堂は爆心地からわずか500メートルの場所にあり、堂内にいた多くの人々が犠牲となりました。堅牢な聖堂は一瞬で崩れ落ち、祈りの場は廃墟と化しました。信仰の自由を取り戻した象徴の建物が、再び破壊されてしまったのです。



△今も残る当時の屋根の一部と現在の浦上天主堂



△被爆直後の浦上天主堂の入り口

2. 残された永井隆博士の言葉

永井隆博士は被爆後も如己堂（浦上天主堂のそばにあり博士の病室兼書斎）で執筆を続け、『長崎の鐘』などで崩壊した浦上天主堂の鐘を平和の象徴として描きました。著作の収益を天主堂再建に寄付し、信仰深いカトリック信者として再建にも尽力しました。

「己のごとく人を愛する」

それは、憎しみではなく愛と赦しを選ぶ生き方を被爆地から世界へ伝える強いメッセージです。

永井博士は原爆で被爆し、さらに白血病で寝たきりの生活を余儀なくされながらも、人々のために尽くしました。わずか二畳の部屋で十七冊もの本を執筆し、「うちの本箱」と呼ばれる場所を作り、子どもたちに本を読ませました。苦しみの中にあっても人を思う博士の姿は「平和の原点」です。

3. まとめ

二つの悲劇を乗り越えた浦上天主堂は、今も平和を願うシンボルです。現地に訪れるまで、長崎にここまで悲惨な場所があることは知りませんでした。この悲劇を身近な人に伝えるとともに私たちにできることは何か、問い続けていきたいと思います。



△病気で寝ながらもペンを持つ永井隆博士

平和学習提案書

「長崎の被爆クスノキを富士宮市に植樹する事業について」

1. 趣旨

本市において初めて実施された中学生長崎派遣事業を記念し、派遣生徒が現地で学んだ平和の理念を、今後も市民と共有できる形として残すことを目的に、本案を提案する。

2. 被爆クスノキについて

被爆クスノキは、1945年8月9日の長崎原爆により甚大な被害を受けながらも生き残り、現在に至るまで力強く生育している樹木である。

この木は「生命力」と「平和の象徴」として広く知られ、その樹林の二世の苗木が国内だけでも34都府県145都市（2025年4月1日現在）に配布、育成されている。

3. 富士宮市における意義

1. 平和教育の拠点となる

2. 市内の児童・生徒が平和学習の一環として訪れ、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶ場となる。

3. 長崎との交流の証となる

4. 第1回中学生派遣事業の成果を形として残し、今後の交流発展の基盤となる。

5. 未来世代への継承

6. 戦後80周年を迎えるにあたり、「戦争を二度と繰り返さない」という決意を次世代へ伝える象徴となる。

7. 静岡県内では、富士市、長泉町にしか配布されていないためとても大きな意義あるものとなると考える。

5. まとめ

長崎で学んだ平和への思いを、被爆クスノキの植樹という形で富士宮市に根付かせることは、非常に意義深い事業であると考えます。

この取り組みを通じて、市民一人ひとりが平和の大切さを実感し、未来へと引き継ぐ契機となることを強く期待する。



「これまでの配布の様子」

引用：平和首長会議

写真場所：(左上)長崎県南島原市 (右上)神奈川県三浦市 (左下)大阪府摂津市 (右下)埼玉県蕨市

⇒

参考サイト：レポート

[1]長崎原爆資料館公式ウェブサイト

[2]長崎市永井隆記念館

参考サイト：提案書

[1]平和首長会議ウェブサイト

[2]長崎クスノキプロジェクトウェブサイト